研究会報告

丸山　徳次

里山ORC研究会は、今年度、フィールドワークを行う2回の特別研究会を含めて、全部で6回開催された。さらに、全体の研究会とは別に、研究班1および研究班2でそれぞれ別に研究推進のための会合も数回開催された。

特別研究会（1）　2007年5月19日（土）　14:00～17:30
瀬田ため池調査研究会

特別研究会（2）　2007年5月26日（土）　10:10～17:00
芝原調査研究会
柴原藤善「田上盆地の水田と水利について」

第16回研究会　2007年6月29日（金）　18:00～20:20
於：龍谷大学深草学舎紫英館2階第2共同研究室
吉村文成「瀬田のため池調査について」

第17回研究会　2007年7月27日（金）　18:00～20:40
於：龍谷大学深草学舎紫英館2階東第2会議室
(1) 高村学人「新たなコモンズの設定－東京都稲城市南山里山コモンズプロジェクトの経過から」
(2) 牛尾洋也「近代における森林・水源地保護の法制度的考察－瀬田里山調査から―」（土地台帳調査経過報告）

(3) 三阪佳弘「上田上地域の土地台帳調査」

第18回研究会　2008年1月19日（金）14:15～18:20
於：龍谷大学大宮学舎北黌101教室
田端英雄「里山について思いのたけを語る」

第19回研究会　2008年2月21日（木）12:30～17:40
於：龍谷大学深草学舎紫英館2階第1共同研究室
(1) 丸山徳次「田端英雄の里山研究－「里山」をめぐる「認識と関心」」
(2) 田端英雄「里山について語る」

今年度は、上記の通り、瀬田ため池調査研究会や芝原調査研究会など、フィールドワーク的な研究会を実施したことが大きな特徴となった。これ以外にも、2007年8月9日（木）には、午前中、法務局および県民情報室での土地台帳調査のあと、午後からは滋賀森林管理署を訪問し、聞き取り調査をすると同時に、数冊の文献資料の貸与を受けた。

また、今年度は、研究班ごとに研究推進会議が開催され、研究班2では、2008年4月26日（木）、5月25日（金）に研究推進会議を実施し、5月25日には研究班1も別個に研究推進会議を開催した。

また、研究会とは呼ばなかったが、2007年11月17日（土）には、須藤研究スタッフを中心にして実施している上田上民具調査の中間成果発表が、国際文化学部との共催で行われ、里山ORC研究スタッフの参加を求めた。須藤護氏が「モノが語る生活の歴史－大津市上田上牧地区・郷土史料館の資料調査から」と題して報告し、里山ORCのRAである蔭山歩氏が「暮らしの中の造形－田上かすりと手ぬぐい」、越田純市氏（仏教大学学生）が「綿繰り機」、豊田悠・田邊真未両氏（龍谷大学国際文化学部学生）が「おさ（筬）－絣を織る」について、それぞれ報告発表した。報告後は、過去の暮らしの中での「女たち」の位置と役割について、活発な議論がなされた。

特別研究会（1）について

「瀬田ため池調査」研究会として2007年5月19日に実施した。研究スタッフの吉村

文成氏の案内で、龍谷大学瀬田学舎を出発し、文化ゾーンを抜けて「水取り喧嘩場」、月輪大池、上丸尾池、下丸尾池、上長尾池、大池、尉池、山ノ上池、下月輪池など、瀬田丘陵北面から琵琶湖方向に下っていく瀬田地区のため池を見てまわった。

夕刻からは南大萱資料室の方々と懇親会。「じゅんじゅん焼き」と呼ばれる伝統的な鍋料理をいただいた。鶏肉のすき焼きに近いもので、「じゅんじゅん」という名称の意味については、地元の人びとにとっても明らかではないようだが、伝統的には男衆だけの寄り合いであり、主催者が順に巡っていくようなので、鍋調理の擬音語というよりは、「順順」という意味から来ているのではないか、との解釈が提案された。

特別研究会（2）について

「芝原調査研究会」として2007年5月26日に実施した。まず、当日案内をしていただいた大津市上田上芝原在住の柴原藤善氏（滋賀県農業技術振興センター環境研究部長（兼）病害虫防除所長）から、「田上盆地の水田と水利について」というお話をうかがった。柴原氏のお話のレジュメから要点を抜粋すると、以下の通りである。

〈滋賀県には、琵琶湖にほぼ匹敵する面積の農耕地（水田が92%を占める。全国第2位）〔第1位は富山県〕が広がり、古くから琵琶湖と調和した水田農業が発達してきた。

稲作は、「稲は土でとり、ムギは肥料でとる」のことわざにあるように、化学肥料・農薬、さらには農業の機械化、土地改良（基盤整備）等の技術革新が進んだ今日にあっても、地力に依存（例えば、水稲が吸収する窒素量6〜7割を地力窒素が占める）する農業形態であり、土地生産力が高く、国土保全機能、環境保全機能、生物多様性保全機能等を有することから、これら多面的な機能〔農水省が言うところの〕の一層の発揮と維持増進に期待が高まっている。田園を含む里山の保全もそのひとつに位置付けられよう。

水田の多面的機能の多くは、土壌の持つ物質循環機能に支えられており、物資循環の担い手である土壌微生物の働きを理解することは、環境教育、食育教育の基礎ともなる重要な部分と考えられ、日本土壌肥料学会では土壌教育に力を入れ、本年8月10日に栗東自然観察の森で土壌観察会を開催することにしている。

さて、今回調査する田上盆地は、瀬田丘陵（古琵琶湖層群）と田上山地（花崗岩）に挟まれ、北東から南東に伸びる谷盆地で、大戸川およびその支流によって埋設されたものである。また、水田用水は、大戸川（牧町地先）から自然勾配で導水しており、明治

以降に積極的に植林された田上山地で貯えられた水が水田を潤している。耕地土壌は、灰色低地土（作土直下の次層が中粗粒または礫質）に分類される乾田タイプで、自然肥沃土は中程度であるが、養分が溶脱されやすく、いわゆる「秋落ち田（老朽化水田）」になりやすい水田である。明治時代には、良質米生産に励み、良食味米の代表的産地として「田上米」のブランドが定着した地域である。

今回は、田上盆地にある芝原町の水田地帯を案内し、米づくりや土壌・水利の特徴を説明するとともに、当地区の水田土壌の特徴、琵琶湖の水質保全に寄与する本県土づくり・施肥技術について紹介したい。今後の調査のきっかけとなり、里山保全の一助となれば幸いである。〉

最初に、上田上牧町、大戸川と萱尾川との間に広がる上田上圃場整備地を見学した。大戸川の北川側面に用水路が設置されている。オオムギが植えられた田が広がっていた。オオムギはほとんどが麦茶にされるようだ。このあたりの田は湿田であり、水を抜くために暗渠が設置され、所々に暗渠の先端部分にあたるパイプが垂直に地表面に出ていた。暗渠にはヨシが使われたようだ。

この後、上田上中野町にむかい、大戸川からの用水の経路を見学した。

次に、上田上芝原町の水田地帯を見学した。ここは圃場整備がなされておらず、転作要求に応じないで米の自主生産がなされている。瀬田川から萱尾川・大戸川に向かう一帯であり、50ヘクタールの水田を25～26戸の農家が営んでいるが、その内の7ヘクタールは大鳥居の新入居者が営んでいる。水は大戸川からの用水路でまかなわれているが、高い場所のいくつかの田においては、以前は山手にため池がいくつかあり、そこから供給していたが、現在はポンプで井戸水を汲み上げている。大戸川からの用水は、「三が湯」と呼ばれた。三つの村が使う用水という意味である。これに関連して、春の湯立祭、秋の湯立祭が行われる。

柴原氏によれば、水田においては、窒素のコントロールが重要だし、なかなか難しい。窒素のコントロールは、あくまでも土壌づくりが基本であり、それに肥料が加わる。土壌づくりと施肥は、以前は稲藁が中心だった。牛糞の堆肥もいくらか用いられた。

柴原氏から、「水田ハロー」による浅水代かきと「側条施肥田植機」によって水田からの栄養塩類の流出量を低減する新技術について説明を受けた。

柴原家を訪ねる。

その後、瀬田丘陵の南面下に位置する柴原家を訪ね、昼食をとり、昼食後、柴原藤善氏の父上（昭和4年生）から、おおよそ次のようなお話を伺った。

〈明治時代の初期は、はげ山に近かっただろう。保安林指定が早くなされ、ヤシャブなどが植えられたし、土壌流出を防ぐため土で造った堰堤があちこちに設けられた。今の柴原の家は、昭和46年に建築されたが、いくつかの柱は山から直接とったものである。昭和40年代までは、用材の供給地として山は利用されていたし、「割木づくり」も行われた。南大萱の方から柴や割木を買いに人々が来ていた。昭和22～23年頃まで、パルプ材のための松の伐採がよく行われていた。大方はアカマツであり、マツタケもよくとれた。

「瀬田山」という言葉も使われたが、それぞれの地区でそれぞれの山を固有に呼んでいた。「源内山」とか、「大神山」とか、「土場山」とかいったように。「源内」はどちらかと言うと「ゲナイ」と発音した。

瀬田山は膳所藩からの払い下げ地であり、個人持ちとなっていた。「村山」は六箇山（？）にあった。〉

中野家を訪ねる。

中野家はもともと八日市にあったが、室町時代に荒戸神社近くに移り、その後、今の芝原に移った。明治初年に膳所藩から寺社地などが払い下げされた。当家の門は、膳所城の「水門」であった。膳所藩の第5代城主・貞義（？）の時代に開墾が行われた。明治の2、3年の第20代で、膳所藩は終わった。牧荘、中荘、杣の三つの荘園があったが、その内の中荘を中野家が管理していた。大平山の法蔵寺は、中野家の菩提寺である。

法蔵寺を訪ねる。

現在の住職は昭和34年に入山したが、当時すでに大平山はヒノキ林だった。昭和20年代に書院の建設を行ったが、その時にも大平山からのヒノキ用材を用いた。現在の本堂は、明治40年に建設されたものである。大平山は、この春から、大津市・大津森林組合・本蔵寺の三者で、琵琶湖森林づくり県民税の適用による里山づくりの対象になっている。

檀家は全部で11戸あるが、その内、芝原在住は4戸のみである。

第16回研究会について

研究班2では、2008年4月26日（木）、5月25日（金）と研究推進会議を開催し、瀬田丘陵およびそれを挟んだ南北地区の調査研究について意見交換し、「ブレインストーミング」を行った。その延長上で第16回研究会を、研究班2が呼びかけた全体研究会とした。吉村文成氏が「瀬田のため池調査について」と題して、2006年度年次報告書に掲載された「畠田（はたけだ）の発見－大津市瀬田地区のため池調査から」の概要を述べるとともに、見いだされた問題点について報告した。今後は膳所藩の文書を調査して、江戸時代の具体的な山利用について研究する必要があること等が論議された。

第17回研究会について

法学関係者3名の報告を中心とした研究会だった。まず、高村学人氏（立命館大学）が、東京都稲城市での「新たなコモンズの設定」の事例を紹介し、いわば「入会地の現代版」とでも呼ぶべき形態の可能性について論じた。

昨年度、上田上地区の土地台帳の調査を行ってきたが、今年度はその継続に加えて、法務局および県民情報室（滋賀県庁内）において、瀬田丘陵そのもの及び瀬田地区に関わる土地台帳等の調査を実施してきた。本研究会では、牛尾洋也氏および三阪佳弘氏が中間報告を行った。

第18回研究会について

（有）応用里山研究所の田端英雄氏を招いての研究会。「里山について思いのたけを語る」と題して、4時間休みなく熱弁を振るわれた。「国際シンポへ向けての第1回討論会」のつもりであったが、残念ながらほとんどディスカッションの時間が取れなかった。

田端氏は、これまで生態学者として活動される中で、里山的自然を既存の生態学が扱いきれないことに気づく経験を重ねてこられたが、特に京阪奈丘陵での関西学研都市開発でのオオタカ保全問題の経験や、同志社大学校地学術調査委員会での経験を通して、里山の特殊性に気づいていかれた経緯を、まず詳しく話された。

とりわけ、植物生態学は一般に地質の異なりに眼を向けないで植生調査を行うが、しかし、植生をはじめとする自然の成り立ちは地質（堆積物）と深く関わっている。特に粘土層は水との関係で重要な意味をもっているが、このことはまた、水田やため池の立

地とも深く関わっており、人間の活動も地質との関連性を示している。京阪奈丘陵の田辺側では、砂層に茶畑が分布し、砂層と粘土層とが重なる箇所に竹林が分布している。人間の手が加わった所が自然となっている場所に対して、従来の生態学はきちんと把握することができない。人間が自然に手を加えたものに対して、生態学は説明原理をもっていないのであって、人間を含めた自然をどう扱うのかが問題であり、人間による自然の利用の仕方を、生態学は見ることができるべきだ、と考えるようになった。(1992年「里山研究会」設立)

里山の研究を通して様々なことが分かってきた。例えば、日本の昆虫類の中には、夏に水田において子育てをするものがいくつもいる。また、田の畦に育つワレモコウ、キキョウ、オミナエシといった植物が、内蒙古の草原地帯に多数見られるが、grasslandと区別されるmeadowこそは、中国における「草甸」であり、日本全土をみれば広大な面積となる畦の植生とは、日本の草甸植生である。想像力を必要とすることであるが、日本総体として里山を考えるべきである。

こうして田端氏は、景観生態学との出会いの重要性を語り、里山が自然的景観であるばかりか、文化的景観、歴史的景観であると主張される。さらに田端氏は、里山利用の実際を、主としてバイオマス利用と粗朶利用の面から紹介された。そして日本全体の産業構造の変革を「妥協することなく」実現する必要性を強調された。また、韓国と中国での里山状況について触れられ、日本での経験を韓国や中国に伝えていくことの重要性を語られた。　レジュメには里山ORCについて、「龍谷の森から外へ展開できない、狭い環境教育とか地域住民との連携に矮小化している」、「今のやり方では、里山林を劣化させるか、遷移を進行させて極相林に導くしか道はない」といった過激な批判が見られるが、討議の時間がなかったのが残念である。

第19回研究会について

(1) 丸山徳次「田端英雄の里山研究－「里山」をめぐる「認識と関心」」

前回の田端氏の報告をまとめる意味も込めて、田端氏のこれまでの里山研究の経緯と意味を論じ、前提となっている問いの意義に触れた。あわせて生態学の科学としての特殊性についても簡単に述べた。そもそも価値判断から完全に自由に「自然」の規定はできないし、生態学の概念構成はできないことを主張した。つまり、生態学的認識は如何

なる関心によって指導され、構成されるのか、についての反省自覚が不徹底である所に生態学の科学としての不安定性がある、というのが私のテーゼである。

(2) 田端英雄「里山について語る」

田端氏は、里山とは農業的自然と林業的自然とがセットになった自然である、という里山の定義を改めて強調し、農業の変質が農業的自然の荒廃を招き、林業の変質が林業的自然の荒廃を招いているのだから、新しい農業と新しい林業をおこすことによってしか「里山の自然」は救えない、ということを改めて主張した。―里山の荒廃のメルクマールは、生物多様性が減少している点にある。「里山問題」を追い詰められるように考えるのようになって、日本の自然をどう捉えるかを改めて考えるようになった。日本の自然を考えるのに日本だけ見ていてはわからない。中国大陸と朝鮮半島に眼を向けた。日本の畦に育つ多年生草本ワレモコウを京都の精華町で見ることで、中国の草甸の植生とのつながりを見るようになっていったが、想像力を伴うことによって初めて認識できる自然がある。里山林の利用としては、水車型ペレット生産を提案している。かつて柴や薪を利用したように、裏山からペレットを生産する一種の地産地消を推奨する。また、粗朶利用も推進している。滋賀県湖東では、田の暗渠排水に粗朶を利用する伝統があり、里山ORCとしても調査研究のテーマになりうるのではないか。

討議では、前半、法学者たちと入会権や財産区といった土地の所有と利用に関する質疑応答がなされ、里山問題においても縦割り行政の問題性があることが改めて指摘されると同時に、田端氏は、法や行政によって上から規制する発想を捨てて、地域の合意形成を積み上げることの重要性を強調した。後半は、里山の「荒廃」という言葉の使用をめぐって議論が紛糾し、里山的利用が生物多様性をもたらすことが実証されているのか、について論議された。また、「典型的な里山」という表現が調和に満ちた麗しい自然といったイメージを喚起しすぎる点が問題視された。